



自然保護運動にもつとも
必要なことはなにか

江 口 完

われわれ日本人は風光明媚な国土に恵まれ、草花や自然を愛する国民であるとして一般に信じられている。その証拠として、美術的価値の高い日本庭園をはじめ、自然の素材を上手にとり入れた絵画・建築・造形物などにみられる格調の高い芸術性があげられる。

ドロンコ道の住宅街を、コエ汲み自動車がわがもの顔に走っているようにとも、家の中はきちんと整頓され、掃除がゆきとどいていっている。どんなに貧乏そうな家でも、大抵の庭は草花が植えられ、手入れされている。おそらく、これほど風流で清潔すぎない国民は世界広しといえども、そうざらにあるま

い。
しかるに一步自宅から外に出ると、別人のように豹変する。乗物や公園・遊園地などのゴミの山はいうにおよばず、駅のホームや歩道の上でも平気でタンをはいたり、火のついた煙草をすてる。自分の家の前になければ紙くずをすてたり、立小便することにも少しも抵抗を感じない。これは公園のどこに便所をたてるとか、施設や路線をどうするとかいう以前の問題である。

政治的次元における自然保護を目的とした、権威ある勧告が必要であることは論をまたない。しかしわが国の美しい自然をいつまでも保存し、快適な住み場所とするためになによりも必要なことは、国民の間に公德心を育てることであると私は考える。公德心の高揚は即ち自然愛護につながる。それは理屈のうえからではなく、実際の具体的行動としてあらわれてくるだろう。為政者や国民の公德心が高ければ、自然や公園は専門家の技術的アドバイスでじゅうぶん保護されるにちがいない。

われわれは、次代をになう少年少女たちに公德心を植えつけようではないか。それはコトバや字で教えることではなく、われわれ大人が、日常の行動で範を示すことである。
(道・林務部道有林第二課)

堤 案

光岡義彦

本協会の会員を見ても、本道の中心的有名なばかりで構成されているような感じをうけ、なにやら近寄りたいたいものを感じます。そして一般の人達が少ないのは、そのせいとも感じられるのです。これら自然保護の思想普及は、若者より発せられて伸展していく段階がもつとも重要で、底辺の拡大が一層重要視されると思えます。それで当協会も、これらの件についてはなんらかの方法を考えてほしいと思うのです。

たとえば、学校関係などでキチンとした指導者を置き、その下に生徒達を加えて協会の一員とすることなど、いかがでしょうか。テキストとして、会誌が「問題の提示」ともなると思うのですが、つまりグールプ協会加盟ということなのですが――。

×

つぎに「自然保護」という問題ですが、これほどその問題が、深く広い範囲にまたがっているものはないと思うのです。高山植物を採取してはいけません。枝を折ってはいけないというような保護の問題もあり

ましようが、これとはべつに、合法的に社会の大きなしくみがヒタヒタと人間にのこされた最後の精神的な、また物的なものを亡ぼしているように考えます。ここでもう一度「自然保護」という問題に対して

。人間社会と自然との関係

。開発と自然の破壊

。自然保護運動について精神的な国民運動につながるには

。自然保護の意味と問題点

。何をどのように守るのか

。公害（人災）との関係

などについて解答を見いだすべく、これら保護政策の進んでいる諸外国の現在ある良きすがたが、どのようにして苦難をのりこえて政策化していったかなどを例にとりその根本的な基礎的問題を会報にて学びたいと思えます。それでこれらについてシリーズものとして、これから連載していただけないでしょうか。それにより、自然保護についてしっかりとした基礎的考え方を持つことができるような気がするのですが。

×

つぎに協会を運営されておられる役員の方、どのような方針組織のもとに、それらを展開されているか知りたいのです。これからこういう「目標」のもとに「こういう風」に運動を展開していくなどを知るこ

とができれば、われわれ会員は何をなすべきか「行政に何をいつづけるか」など、その問題点をとらえ運動の盛り上がりにも一助となると思えますが――。

そのほか、自然保護普及のための良書について、図書名、発行所、価格など、また地方に埋もれて知らされていないけれども、保護ととり組んで活動している人、グループ、活動内容を会報などで知らせてもらえないでしょうか。これらの点についてお願いやらをいたしたいと思えます。今後ともよろしくお願い申しあげます。

（岩見沢農業高校教諭）

私の考え方

上田福雄

昭和のはじめ頃、私はほとんどの週末を山歩きですごした。山歩きといつては少し大げさかもしれない、むしろ、ハイキングといったほうが適切だろう。

札幌を中心としたごく小さな行動半径内で、あるときは日帰り、あるときは一泊と、円山・藻岩からはじまって三段・砥石、それに手稲・奥手稲、少し足をのびして朝里岳・余市岳と、ごく素朴な歩きで山脈の先輩とともに自然を楽しみ、気楽に歩

いたものである。

自然はそんな私達を思いがけないいろいろな変化をもつて、あるときは大きな感激のうずの中に巻きこみ、また、あるときは非常なきびしさをもつて私達を拒み、自然の恐ろしさを味あわせてくれた。ところが、最近の山はどうだろう。円山・藻岩・手稲、どれもこれも腹の立つほど俗化され墮落してしまった。みんなこれ、人間のなせる業だ。

その昔、文化住宅なる言葉がはやったがいまはどこへ行っても文化国家、文化都市だ。コンクリートの大きなビルデングが並び立てば、文化都市だと思っている。何が文化都市なもんか、とんでもない話だ。手近な話だが、元大通り西九丁目に鯨が森というのがあった。札幌の下真中であつて、珍らしいくらいこんもりとした自然林であったが、いまは見るかげもなくさびれ（？）果ててしまった。植物園も削られた。北一条通りの、開拓時代からの老木も伐り倒された。枯木といえればそれまでだが、そうなる前に、もつと保護策がとられてしかるべきだったと思う。

年々歳々、貴重な自然は侵食されてさびれてゆくばかりである。北海道にしても、そうである。観光々々で猫も杓子もおしかければ、当然俗化し、荒されること必定で

ある。開発も結構、自然の利用、大いに賛成。だがその前に、この世のある限り大地と自然にさからわず、これを保護育成することを忘れてはならないと思う。

(北海道本の会々員)

道路あれこれ

新田季利

国立公園地帯をはじめとして、各観光地内の道路は、ここ数年のあいだに、ずいぶん立派になってきた。これらの新しい道路は、尾根をけずり谷を埋めてまっすぐにのび、広く、緩やかである。黒くなめらかなペーパメント、まっ白なセンター・ラインやガード・レール、それに緑の森林が巧まざるコントラストを織りなして、旅はまことに快適であるといえる。

反面、旧道はまったく克明に、山のヒダをひろって曲がりくねっていた。バスがすれ違うのにも困るほどせまくて、危険な道路であった。その代わり、トドマツ、エゾマツ、カバなどの大木が、車窓から手のとどくような身近さに立っていた。場所によっては、木々が大きな枝をつらねて緑のアーチをつくっていたし、草花は大小、色あいにさまざまな変化を見せて、旅を楽しま

せてくれた。

道路はたしかに立派になった。これだけの道路をつくるためには、伐開や法切りが大きくするのはやむをえないだろう。人工の度合いを大きく、それだけ自然を破壊するのもし方のないことかも知れない。しかし、早く安全に走るだけが、この道路のねらいだったろうかと反問したくなるのが、私の実感なのである。この意味あいから、ふだん気になっていることを一、二点提案してみたと思う。

伐開幅は最少限にとどめること。

感じていって申しわけないが、新道はいままでの道路にくらべて、道路幅で二倍に

できあがった道路についてみると、法切りの最大の部分を基準にして、一律に伐開幅がとられているように思える。法の小さいところや埋め立てた部分などでは、事前の綿密な計画によってもっとたくさん立木を残せたはずだと思ふのである。

数百年を経た貴重な森林——観光資源が、少し無雑作に扱われてはいまいか。人工を前面に出さないで、もつと自然をとりたい道路計画、施工技術を考えてほしいとねがっている。

旧道を利用すること。

行楽の人たちは、すべて大型バス利用と

は限らない。マイカーでゆっくりという家族づれもあれば、サイクリングの若者たちもあろう。自動車の騒音と排気ガスをさけて、自然に浸りたい人もあるに違いない。この意味から、旧道を利用することを考えてみたらどんなものであろうか。

幸いにこれらの道路には、新道にない良さがたくさん残されている。古ぞうりのように投げすてるのは惜しい。数kmとまよったものだけでも、保守、管理をじゅうぶんにして利用していきたいと思っている。

(道有林第三課)

中空都市の構想

瀬古海人

都市の発達と自然保護との統合というところがよくいわれます。自然をまったく敵とするような都市の大型化が、正しい意味での「発達」といえるのかどうかはすこぶる疑問ですけれども、現実の問題として町が大きくなれば、森や川や野原が傷つけられ、失われたりしがちです。都市に人間が作った小さな自然、たとえば公園とか、街路樹といったようなものも、やれ大気汚染、やれ水濁れといった工合に、いためつけられて散々な有様です。

一つにはこうした都市のお飾りが、昔ながらの形ではいまの都市には適合しなくなったのかも知れません。けれども、なお都市の人々は自然を強く求めます。というよりも、都市が大きくなければなるほど、人々はかえって緑を求めるといってもいいでしょう。こうした欲求に対処するにはどうしたらいいのか。それは十分な「自然」を(それがどのような種類のものでもかまいませんが)都市のごく近くに用意するか、あるいは思い切って都市の中にかかえこんでしまうことです。この頃考えられつつある都市周辺の自然公園などは、前者の例になるでしょう。

後者の方法をえらぶのはもっとむずかしいのですが、既成の觀念にとらわれなければ、なんとでもなるはずでです。どの街路にも、どの地区にも街路樹を植えないければならないなどということはありません。ある道には、植木一本なくてもよろしい。しかし、ある広い道路には、たとえば上空からみたときなど路面が見えないくらいに立派な樹をまとめて植えることにする。

いまのように法律だか規則だか知りませんが、幅何メートル以上の道には並木を作るだとか、何メートル以下の道には樹は植えられないだとかいってはいは駄目です。とても、人間の住むような気持ちのいい町な

どできつこありません。大体、いくら法律に合った道だとしても、強い風へのべつさらされているようなところだったら、並木など育つはずがないでしょう。「規則」が責任を負って育ててくれるのならべつです。

都市の中の自然、たとえば「緑」をまとめる方式を、さらにおしすすめて行くとしまいには巨大な緑の集団のまわりに人の住み、あるいは仕事をするとところがある、というような形が想像されます。けれども、大きな森をかかえこんで、しかもそれを保つことはひどくむずかしい。誰れでも近道を好みますから、そうしなければと森を横切る道が作られることでしょう。結局、元の黙阿弥になるかとおもわれます。

都市の内包する「自然」が湖だったらどうでしょう。森とちがつて短絡するには船によるほかにありませんから、「道」で自然のこわされることは防がれます。都市に「侵されない空間」をつくるのが考えられていいのではないのでしょうか。具体的なプランはいずれまとめることにします。しかし、同じようなことを考えつく人に先きを越されるといけませんから、こうした意図をふくむ案を、「中空都市」という名で提案しておきたいとおもいます。

(古物商)

カタクリの群落

新妻 博

カタクリの花はサッポロ周辺で、五月一日を中心とした日が見頃と記憶しているが、いま、それをふんだんに見られるのは、もとの道管マコモナイ・ゴルフ・コースの豊平川に面した山手の疎林であろう。

ここは、いまだにカタクリの花の群落が咲きほこつていて、風にゆれる花カンザンはおうばかりである。以前はモイワ山軍艦岬あたりの林の中や、オイラン淵(現在のモナミ公園)にも見られ、附近の墓地から採集してきたこともあったが、すでに昔がたりに帰属してしまった。

ゴルフ・コースは公園として再建を急いでおり、舗装路が園内をほしっているが、なにぶんにも道ばたの林中のこととて、あの美しい花を見逃すひともあるまいから、絶滅の途を早めているような気がしてならない。あのあたりは、野鳥の種類も多く、一昨年(一九六七年五月三日)は十八種一九六八年五月三日は、二十三種を確認している。

(北海道放送事業部)

駄弁 駄筆

原 秀 雄

つれづれなるままにと書き出して、まさか徒然草の序段書きはじめの文句と同じだなどと、その著者の吉田兼好から、はるばる版權侵害などはいわれまいと、あえて同じ文言を書いてしまったのだが、さてある日、つれづれなる耳もとにラジオの歌謡とやらが入ってきた。聞くまいとしても、きこえるのだから致し方がない。

なんでも忘れることでは人後におちぬ自分のこと、歌の文句などは右から左みごとに忘れたが、その歌謡の内容はどこかの野原か山かを歩いていたら、なにやら美しい花が目についた。あとになって考えたら、そのとき折りとなればよかったといった意味のものであったことだけはさすがの自分も覚えていた。誰の作詩でなどいうことは、これまた右から左であることもちろん。この歌を裏返してみると、野山に自生の草や木、葉や花を折りとることくらいは日常茶飯事、美しい花が咲いていたら折りとなれば損だといわぬばかりの歌のように、自分の胸にはひびいた。なにもこの歌の作

者や放送局に文句をつける意志はさらさらないが、一体に野山に自生の花を折りとることくらいは、なんとも思っていないのが、世間一般ではあるまいかと、少々肌寒い思いをした。

七、八年前のある日、自分のところに一人の見知らぬ男が訪ねてきた。会ってみると開口一番、じつは豊平川の沿岸、定山溪の少し下流に金鉱とやらがあるとかで、その試掘をしかるべき役所に出願したが、あの辺り一帯にはモイワナズナという植物が生えている、それをそこなわぬようにせよといわれたので、どんな木か草か教えてくれというのである。

冬だったので致し方もなく植物図鑑を見せたところが、本人はなにかすばらしく大きな華やかな花でも咲く植物と思つて気負い込んでやってきたらしいが、案に相違のきわめて地味な植物なので、その男の顔にはなんだこんなつまらぬ草かといった表情がありありと見られ、やがて男の口から「なんだ、こんなつまらぬ草かね、こんなものそこらの草と大した違いはないじゃないか」という言葉がとび出した。自分はいかに「お前みたいな山師になにがわかるか」といってやりたかったが、そ知らぬ顔で「お前さんはそう思うか知らぬが、この植物は学問上重要なもの、それではなければ

君がそんな注意を受けるはずはないじゃないか」といってやったことがある。

その男はわかったようなわからぬような顔をして、首をひねりながら帰って行ったが、その後、あの辺りで例の鉱山とやらの試掘されたことを聞かなかったことを、モイワズナのためにというより、あのあたりの植物全体のために喜んだものである。

話がとんで恐縮だが、ある農業に関する技術員の一人に会ったとき、農業は自然を破壊せねばできぬ仕事だという。一応もつとものような話だが、そのうしろに貴重な自然がなかったら、完全な農業はなりたたぬものであることを忘れている暴論だと、自分には受けとれた。

まだいろいろなことに出会ったが、一々例をあげるときりもない。多くの人は、広い意味での自然の中に住んでおりながら、自然の貴重さをほとんど、あるいはまったく考えようもしない。これを余りにも軽く考え、扱い、また手荒く破壊して悔いなくいようである。

北海道には、まだまだ多くの自然が今日まで、残されている。われわれはもつと大切にこれを護らねばなるまい。しかもそれは一日早ければ一日、一年早ければ一年の得となる。それには一人一人の自覚に待つよりしかたもないが、そのためにも自然保

護協会の存在、またその活動に待たれるところは大きい。こんなことは、自分ごときが貴重な紙面を費してまで、ことごとしく書きたてることもあるまいとは考えたが、枯木も山のなんとやら、あえて秃筆をとった次第である。——一九六九・二・一七——

(北海道園芸事務所長)

十年ぶりに上高地を訪れて

長谷川 雄七

昨年の六月、私は十年ぶりで中部山岳国立公園の上高地を訪れ、「自然保護」ということについていろいろと考えさせられた。

十年間の時の流れが上高地をどのように変えているかは、私には非常に興味あることではしたが、驚ろいたことに、私が最初に上高地を訪れたとき受けた深い印象と少しも変わっていないどころか、深々と縁に つままれた自然は、あの日以上に感動的でした。もちろん旅館やホテルは、増改築してそれぞれ立派になっていました。しかしどの建物も縁にすっぽりと包まれて、すぐそばまで行かなければ、こんな大きな立派な建物があると気づかないのです。上高地

は国立公園の利用拠点として、厚生省所管の集団施設地区となっております。厚生省は上高地の維持管理のために、なみなみならぬ努力を続けてきました。旅館やホテルなどの工作物を新しく建てることはみとめず、増改築に際しても高さの制限はもろろんのこと、色彩、デザインなどにも神経質と思われるほどの注意をはらってきたのです。したがって、きずつけられたり、切られたりすることのなかった樹々は、十年間にますます高く、太く、たくましくなつたのに対し、建物のほうは樹々の間にひっそりしている感じで、時の流れを忘れさせる生きた感動が得られたのでした。これは法的な規制が、いかに重要であるかを物語っていると思います。

もう一つ感じたことは、利用制限が必要であるということでした。上高地の利用者は、ここ二、三年頭打ちとなり、この傾向はしばらく変わらないだろうとのことです。それは上高地にはいる前に「釜トンネル」という関門があるからなのです。このトンネルは延長八〇〇メートル、平均勾配五パーセント、幅員が狭く一車線ぎりぎりのうえに、曲りくねっていて見透しきかないというしろものなのです。このため、ここの定期路線を持っている松本電鉄のバスは、いまでも旧式のボンネット型のもの

です。シーズンにはいるとトンネルの両口には監視員がつき、上り下りは時間により制限されます。自家用車の急増したこの二、三年、シーズン最盛期には、このトンネルを通過するのに、二時間、三時間かかるのは普通のことになってしまっているのです。このような状態ですから、上高地へのいり込み数は自動的に調整されます。

かくして上高地は快適な自然状態が保たれるわけです。人間の意志にかかわらない利用制限などあまり、ほめられた話ではありませんが、これからの自然公園は、その自然が素晴らしいほど意識的に利用制限をしなければならぬのではないのでしょうか。自然公園は劇場なのです。それも定員以外は、はいれない高級劇場でなければなりません。演技者はもろもろの自然物です。彼らの素晴らしい演技を楽しむためには、場末の映画館のように、つめ込むだけつめ込んではいけません。

自然を保護するということは、単に脆弱い自然物を守るのだとか、文明人としてはずかしいから自然保護を口にする、というものであってはならないと思うのです。このような自然保護は、大局を見失ないがちです。「自然保護」は、人間性回復のため

にこそあらねばならないと思うのです。

(北海道百年記念施設建設事務所)